

# ニジェール支所便り

## 6月号

【編集長】中川企画調査員 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni\_oso\_rep@jica.go.jp

### 松本前支所長の離任挨拶

皆様、こんにちは。2015年4月まで支所長として勤務しておりました松本です。ニジェール在勤中は大変お世話になりました。

私がニジェールに着任した2012年11月には、PDES(経済社会開発計画)のラウンドテーブルがパリで開催され、ニジェールの開発に向けて JICA のみならず各ドナーも大きな期待を寄せたのではないかと思います。しかし、その後の周辺国における治安状況の悪化や、国内では自爆テロ、各種施設の襲撃、暴動などの事件が多数発生するなど、各機関とも各種安全対策に追われ、JICA としても新たな事業を大々的に展開するというわけにはいかなかった2年半でした。そうした状況の中、皆様には特に安全管理に留意し業務を遂行していただいたことに対し深く感謝申し上げます。

本邦帰国後は、中南米部計画・移住課に異動となりましたが、皆様には、今後も引き続きニジェール協力に対するご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

#### ■■■サヘル地域における貯水池の有効活用と自律的コミュニティ開発プロジェクト(VRACS)■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/001/index.html>

ニアメ州の2グループでは、普及・技術移転局の職員と日本人専門家による継続した支援のもと、乾季野菜が終わりました。そのうち Saga グループの状況を報告します。

当グループは1月からキャベツ栽培を行っており、4月16日のField Dayまでに15回のセッションを行いました。毎週のセッションにはほぼ全員が参加しており、遅刻者も少ない等、グループメンバーはFFSに対するモチベーションが高く、組織としての連帯感をもってセッションを実施していることが伺えます。

4月上旬(収穫の2週間程度前)に当グループが利用する灌漑施設が故障し、当サイトの畑への水源となっている溜め池に水が流入しなくなり、涸れてしまいました。その後、メンバーはモーターポンプを借りてきて、他の水源から水を引き、キャベツが枯れてしまうことは防ぐことができました。プロジェクトに対し何らかの支援を要請してくるかと思いましたが、自ら手段を模索し、プロジェクトに頼らず解決したことは、メンバーに主体性が出てきた結果として高く評価できます。



トウガラシを使った忌避剤作成デモンストレーション

畑では、3月頃から害虫であるコナガが発生したため、2種類の市販の農薬と木の実やトウガラシを使った自然農薬(忌避剤)散布を4月まで継続的に行ったものの、効果はありませんでした。

その理由は合成ピレスロイド剤が含まれている市販の農薬を慣習的に複数回散布したことから、農薬に耐性を持つコナガが発生してしまったからだと考えられます。耐性を持ったコナガが一度発生してしまうと、その対処は難しく、被害を抑えることは難しいとされています。このような農薬は本来作期を通して一度だけの散布が望ましく、他の種類の農薬と組み合わせて使うものであったにも関わらず、当該農薬だけが複数回に渡り散布されていました。本来、これらの知見は普及員が有しており、農薬散布時に、その散布方法、時期、想定される効果を十分理解・説明した上で散布するものですが、ただ「害虫が出たら農薬を散布する」と理解していたようで、農薬の無駄遣いをして生態系を変質させる結果となってしまいました。

FFSは農民の自己学習の場であるとともに、普及員が有している知識を農民に伝える手段です。その際、FFSメンバーだけでなく、普及員も対象作物をよく観察することで、生育がどの状況にあるのか、病気、害虫など発生を把握し、適切な対処が可能となります。また、観察を通じ、普及員が知らない害虫や病気が発生しているなど、普及員の知識では対応できなければ、普及員の同僚、上司、研究機関等に問い合わせ、必要な手立てを取ることも、FFSの仕組みに取り入れていますが、今回は普及員の経験不足から、この重大さが把握できていなかったようです。

雨季は乾季に比べ、さらに病虫害が発生しやすい環境となります。FFS関係者による注意深い観察に加え、普及員をサポートするシステム、特に外部の専門家の技術指導を有効に活用することにより問題の解決ができるよう、普及員をはじめとする関係者の指導を今後も継続していきます。

(農業普及専門家 長井宏治)

## ■■みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

今月5月のみんなの学校プロジェクトでは、ニジェールにおける学校運営委員会活動の持続性を高める体制づくりのため、全国8州の教員養成校講師に対して学校運営委員会にかかる研修を実施しました。また、この研修実施に伴い、教育省中央のCGDES調整部、教員の初期および継続研修を担う「初期・継続研修局」局員、ならびに各州にて教員養成校講師をサポートする州CGDES監督官に対する講師研修を行いました。この一連の研修を受け、5月下旬には、研修を受講した教員養成校講師による教員候補生への講義実施が各教員養成校にて行われる予定です。

これら教員養成校への学校運営委員会研修にかかる取り組みは、コミュニティ参加による学校運営委員会活動の活性化においては、保護者・住民のみならず、校長ならびに教員の理解が重要となる点に鑑み、今後、学校現場へと向かう教員候補生に対し、事前に学校運営委員会活動にかかる情報を提供し、赴任後の現場における実践へと結びつけられるようにすることを目的としています。これまで、2007年に機能するCOGESの全国展開を終えているニジェールにおいては、その後毎年1000校ずつ増加する新設校への対応として、CGDES設置のための新校長研修ならびに新CGDES研修が教育省予算もしくはドナー支援により実施されてきました。しかしながら、実際のところ毎年の予算確保は難しく、その継続は明らかに困難です。また、新設校ならずとも毎年配置される新任校長や新任教員への対応にも課題を抱えていると言えます。これらの状況から、教員養成校への学校分権化政策・学校運営委員会にかかる講義を組み込むことは、学校運営委員会活動の継続的な安定化の一つの要素となり得ます。

今後は、今年度卒業予定の教員候補生への当該講義が確実に実施されるようサポートするとともに、当該講義が継続的に教員養成校にて実施されることを目指し、引き続き教育省関係局ならびに教員養成校との協議・調整を進めていきます。

(影山専門家)

## **ニジェール国内の出来事 ～都市圏における髄膜炎の流行～**

ニジェールの都市圏、特にニアメにおいて現在髄膜炎が猛威をふるっています。5月15日付WHOの発表によれば、これまで国内で400人以上が死亡し、患者数は5,855人に上っています。セネガルからエチオピア一帯は、「髄膜炎ベルト」とも呼ばれており、毎年乾季(12月～6月)になると髄膜炎(髄膜炎菌Aが一般的)が流行します。しかし、今回の流行は、これまでの髄膜炎菌A型ではなく、C型およびW135型であり、それがこの大規模な流行をもたらしているとみています(WHO)。国境なき医師団(MSF)によると、髄膜炎菌C型、W135型が、特に青年層や子供に致死的な被害をもたらしており、また人口密集地であるがためその被害は拡大の一途をたどっています。これを受け、WHO、MSFなどの国際医療機関は髄膜炎菌C・W135型に対応するワクチンの接種を、特に被害の深刻な若年層に対して無料で実施しています。ニジェールにおける髄膜炎流行の一日も早い収束と雨季の到来を祈るばかりです。

(佐々木企画調査員)